

①子宮頸がんについて

岡山県の啓発リーフレット

Instagram更新中

子宮けいがん予防
恥ずかしがらずに
ちゃんと聞きな
「知らん」じゃ
済まんから。

HPVワクチンの接種
子宮けいがん検診

小6から
高1相当
無料

20歳を
過ぎたら
定期的に

岡山県



子宮けいがんって、なに!?

子宮けいがんは、毎年多くの若い女性から「いのち」と「未来」を奪っています

日本では、毎年約1万人が子宮けいがんにかかり、約3,000人が亡くなっています。

20代・30代の若い世代で急増するのが特徴です。何が急増？

30代までに治療の過程で子宮を失う人も年間約1,000人いると考えられており、手術やその後遺症でライフプランが大きく変わってしまう可能性があります。

子宮けいがんは**予防できるがん**です。女子だけの問題ではなく、男子も大切な人を守るという気持ちで一緒に考えましょう。

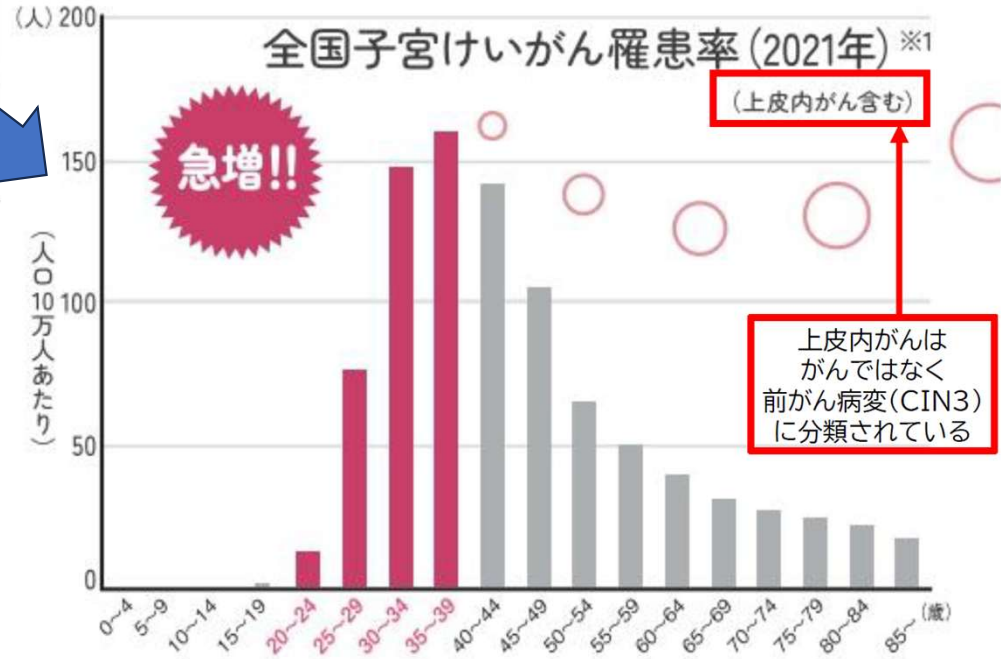


20代・30代のあなたは何をしています？
仕事、恋愛、結婚、出産、育児...
あなたの未来にはたくさんの選択肢があります

若い世代の死亡者が多いような表現

※前がん病変

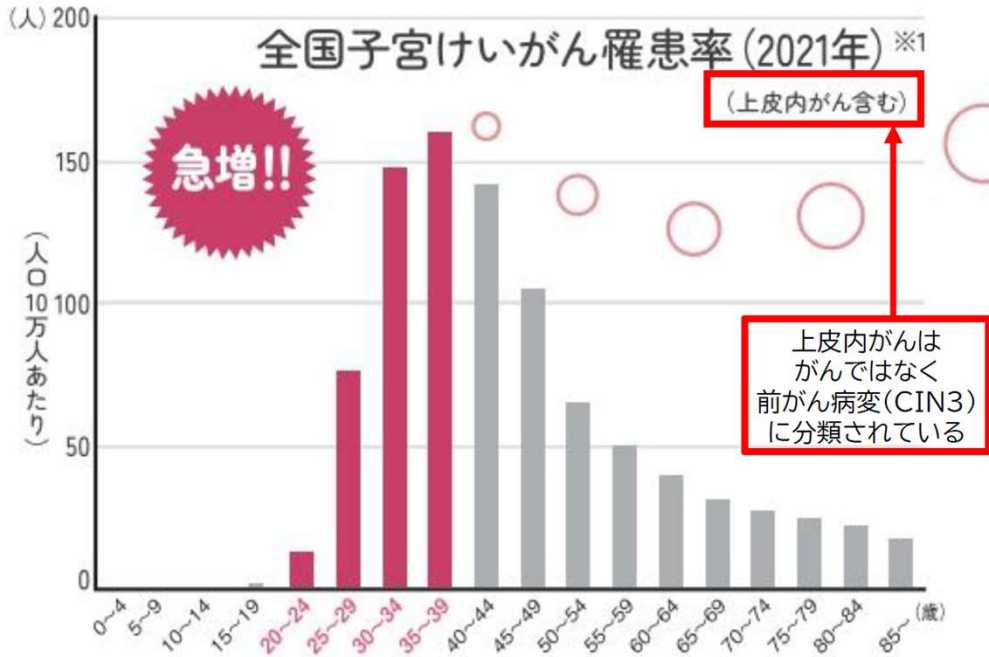
がんになる前、まだ、がん(悪性腫瘍)になっていない状態



岡山県は、啓発リーフレットに、 がんでない数字も組み込んで、 子宮頸がんの罹患率を 水増ししている

①子宮頸がんについて

岡山県の啓発リーフレット



人口10万人あたり

- 15倍に水増し 25~29歳：75人程度
- 10倍に水増し 30~34歳：150人弱
- 6倍に水増し 35~39歳：150人強

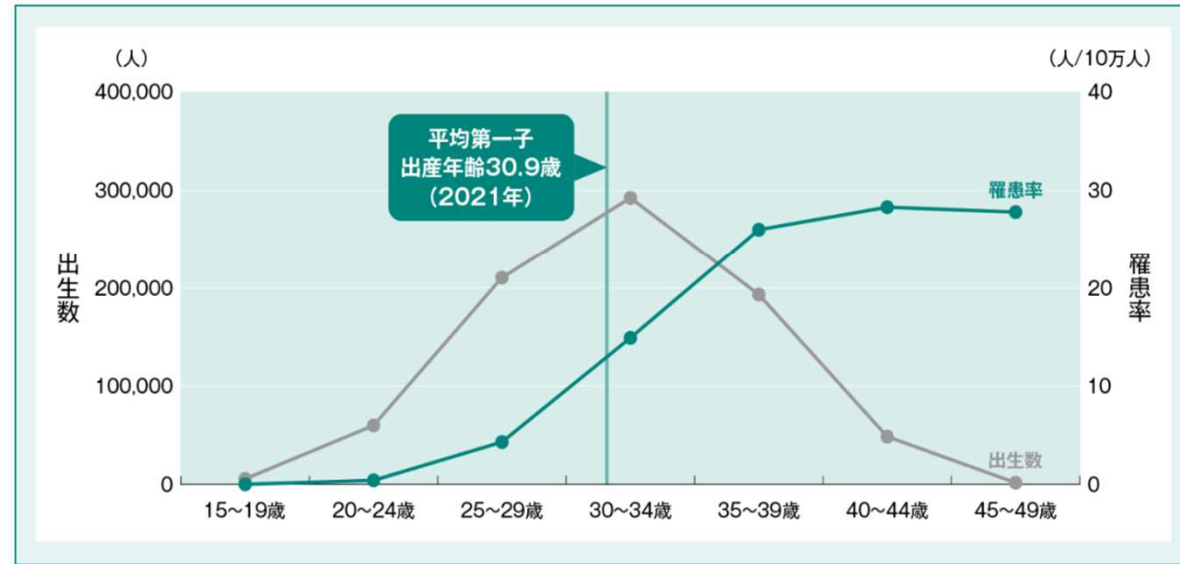
※全罹患数：35,263例 罹患率：人口10万人あたり54.7例
(日本対がん協会のデータ)

MSD社ホームページ

<https://www.msconnect.jp/products/gardasil-silgard9/column/epidemiology/>

図3：女性の年齢別出生数と子宮頸がん罹患率(2021年)

上皮内がん(前がん病変/CIN3)含まず



人口10万人あたり

- 25~29歳：5人程度 がん：5人、前がん病変：70人
- 30~34歳：15人程度 がん：15人、前がん病変：135人
- 35~39歳：25人程度 がん：25人、前がん病変：125人

※全罹患数：10,690例 罹患率：人口10万人あたり16.4例
(国立研究開発法人国立がん研究センターのデータ)

①子宮頸がんについて

実際は、若い世代で、
子宮頸がんで亡くなるケースは稀。

2) どの年齢層で多いか



国立研究開発法人 国立がん研究センター ホームページから抜粋

元データ：人口動態統計がん死亡データ (rateシート)

子宮頸がんで死亡に至る場合の経緯としては、
若いころに前がん病変（CIN）になり、
数十年後に子宮頸がんを発展し、死亡するパターンが通常。

若く時期に子宮頸がんを発展することはほぼ無い。
ましてや、若くして子宮頸がんで死亡するのはほぼゼロ。

◆ 子宮頸がんの原因とされる HPV(ヒトパピローマウイルス) は、性交渉によって感染します。80%の女性が一生に一度は感染するといわれるありふれたウイルスです。

◆ 感染しても2年以内に9割が自然排出されます。まれに感染が持続し、前がん病変(CIN)になることもありますが、そこから正常な細胞に戻ることも多く、子宮頸がんに至る割合は感染者のわずか0.15%とされています。



②HPVワクチンの有効性



厚労省のリーフレット



HPVワクチン接種の対象年齢の方及び保護者の方向けリーフレット（概要版）（PDFファイル: 2.2MB)

HPVワクチンの効果



HPVの中には子宮けいがんをおこしやすい種類(型)のものがあります。

HPVワクチンは、このうち一部の感染を防ぐことができます。

現在日本において受けられるワクチンは、防ぐことができるHPVの種類によって、

2価ワクチン(サーバリックス®)、4価ワクチン(ガーダシル®)、

9価ワクチン(シルガード®9)*の3種類あります。*2023年4月から、シルガード®9も公費で受けられるようになりました。

サーバリックス®およびガーダシル®は、子宮けいがんをおこしやすい種類である

子宮頸がんを防ぐではなく、「原因」を防ぐという表現

HPV16型と18型の感染を防ぐことができます。そのことにより、子宮けいがんの原因の50~70%を防ぎます※1。

シルガード®9は、HPV16型と18型に加え、ほかの5種類※2のHPVの感染も防ぐため、子宮けいがんの原因の80~90%を防ぎます※3。

また、HPVワクチンで、がんになる手前の状態(前がん病変)が減るとともに、

がんそのものを予防する効果があることもわかってきています。「予防する効果がある」とは断言しない。

※1-3 HPV16型と18型が子宮けいがんの原因の50~70%を占め(※1)、HPV31型、33型、45型、52型、58型まで含めると、子宮けいがんの原因の80~90%を占めます(※3)。
※2 HPV31型、33型、45型、52型、58型

ワクチンを受けたら、子宮頸がんにかからない？

- ◆ 200種類ほどある HPVの中で、子宮頸がんにつながる「発がん型HPV」は約15種類。サーバリックス ガーダシルに含まれるのはそのうち2種類だけ、シルガード9でも7種類だけです。

②HPVワクチンの有効性

「予防する効果がある」と断言できない理由

国内の大規模な疫学研究では

Received: 12 February 2022 | Revised: 1 June 2022 | Accepted: 9 June 2022
DOI: 10.1111/cas.15471

Cancer Science WILEY

ORIGINAL ARTICLE

Effectiveness of human papilloma virus (HPV) vaccine in Japan: Multivariate analysis of precancer in Japan: Multivariate analysis of activity

Risa Kudo¹ | Masayuki Sekine¹ | Manako Sharon J. B. Hanley³ | Megumi Kurosawa¹ Etsuko Miyagi⁵ | Sayaka Ikeda⁶ | Asam

¹Department of Obstetrics and Gynecology, Niigata University Graduate School of Medical and Dental Sciences, Niigata, Japan

²Department of Preventive Medicine, Faculty of Medicine, Saga University, Saga, Japan

³Hokkaido University Center for Environmental and Health Sciences, Sapporo, Japan

⁴Departments of Obstetrics and Gynecology, Osaka University Graduate School of Medicine, Osaka, Japan

⁵Department of Obstetrics and Gynecology, Yokohama City University School of Medicine, Yokohama, Japan

⁶Center for Cancer Control and Information Services, National Cancer Center, Tokyo, Japan

Correspondence

国の研究費を使って行われた「HPVワクチンの有効性と安全性の評価のための大規模疫学研究」の2022年9月論文では「前がん病変（HSIL+）に対するHPVワクチンの有効性を統計的有意差をもって示せなかった」と報告されています

※HPVワクチンの有効性と安全性の評価のための大規模疫学研究 新潟大学 工藤らの論文 <https://doi.org/10.1111/cas.15471>

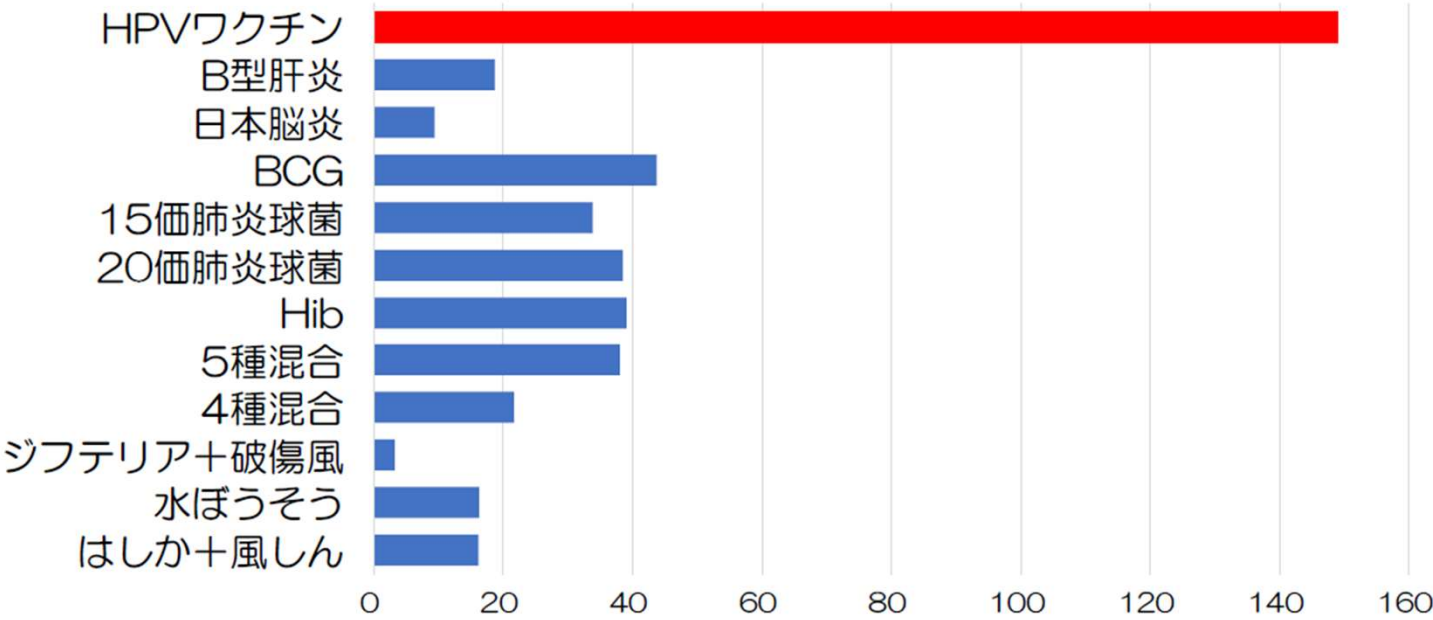
疫学研究で、有効性が示せていない。

予防できたというデータがない。

③HPVワクチンの弊害

100万接種あたりの重篤副反応疑い報告数（件）

厚労省（2026年4月22日副反応検討部会資料）

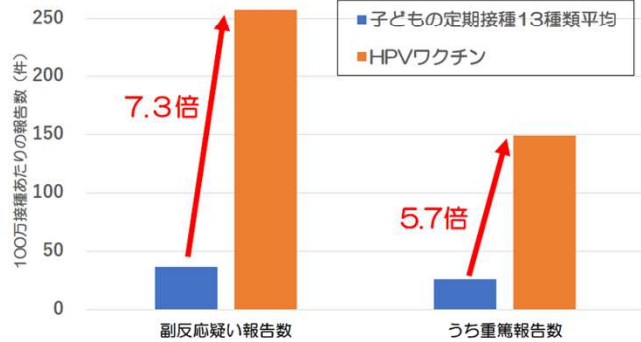


	100万接種あたりの	
	副反応疑い報告	うち重篤報告
子どもの定期接種 13種類平均	36.6	26.0
HPVワクチン	257.4	149.0

7.3倍 5.7倍

厚労省 2026年2月の副反応検討部会資料から

HPVワクチンは副反応報告頻度が高い
公表はされているがメディアは伝えない



③HPVワクチンの弊害



HPVワクチンのリスク

詳細版
P5

厚労省の
リーフレット

筋肉注射という方法で注射します。接種を受けた部分の痛みや腫れ、赤みなどの症状が起こることがあります。

頻度は不明ですが、重い副反応(アナフィラキシー、ギラン・バレー症候群、急性散在性脳脊髄炎(ADEM)、免疫性血小板減少症)^{※1}が起こることがあります。

また、広い範囲の痛み、手足の動かしにくさ、不随意運動^{※2}といった多様な症状が報告されています。

ワクチンが原因となったものかどうか分からないものをふくめて、

接種後に重篤な症状^{※3}として報告があったのは、ワクチンを受けた1万人あたり約2人です。

接種する年齢によって、合計2回または3回接種しますが、

接種した際に気になる症状が現れたら、それ以降の接種をやめることができます。

接種後に気になる症状が出たときは、まずはお医者さんや周りの大人に相談してください^{※4}。

※1 アナフィラキシー:呼吸困難、じんましん等、ギラン・バレー症候群:手足の力が入りにくい等、急性散在性脳正髄炎(ADEM):頭痛、嘔吐、意識低下等、免疫性血小板減少症:紫斑、鼻出血、口腔粘膜出血等

※2 動かそうと思っていないのに体の一部勝手に動いてしまうこと

※3 重篤な症状には、入院相当以上の症状などがふくまれています。報告した医師や企業の判断によるため、必ずしも重篤でないものも重篤として報告されることがあります。

※4 HPVワクチン接種後に生じた症状の診療を行う協力医療機関をお住まいの都道府県ごとに設置しています。

③HPVワクチンの弊害

**2025年1月改訂(第2版)
*2023年3月改訂(第1版、用法変更)

日本標準商品分類番号
876313

製法：2～8℃、凍結を避けること
有効期限：充てん日から3年

ウイルスワクチン類

承認番号 30200AMA0074000
販売開始 2021年2月

生物学的製剤基準

組換え沈降9価ヒトパピローマウイルス様粒子ワクチン(酵母由来)

シルガード®9 水性懸濁筋注シリンジ

MSD

処方箋医薬品：注意—医師等の処方箋に「SILGARD®9 Aqueous Suspension for Intramuscular Injection Syringes」より使用すること

2. 接種不適当者(予防接種を受けることが適当でない者)
2.1 明らかな発熱を呈している者
2.2 重篤な急性疾患にかかっていることが明らかな者
2.3 本剤の成分に対して過敏症を呈したことがあることが明らかな者
2.4 上記に掲げる者のほか、予防接種を行うことが不適当な状態にある者

3. 製法の概要及び組成・性状
3.1 製法の概要
本剤は、「3.2 組成」の項に示す9種類のヒトパピローマウイルス(HPV)各型のL1たん白質ウイルス様粒子(VLP)を含む懸濁液である。各型のVLPは、*Saccharomyces cerevisiae* CANADE3C-5(菌株1895)に各L1たん白質コードするプラスミドを導入して確立した酵母株を培養し、発現したたん白質の自己集合により形成される。精製したVLPは、アルミニウム含有のアジュバント(アルミニウムヒドロキシホスフェイト(磷酸塩))と懸濁させ、アルミニウムを

4. 効能又は効果
ヒトパピローマウイルス6、11、16、18、31、33、45、52及び58型の感染に起因する以下の疾患の予防
○子宮頸癌(扁平上皮癌及び腺癌)及びその前駆病変(子宮頸部上皮内腫瘍(CIN)1、2及び3並びに上皮内癌(AIS))
○外陰上皮内腫瘍(VIN)1、2及び3並びに陰上皮内腫瘍(VaIN)1、2及び3
○尖圭コンジローマ

5. 効能又は効果に関連する注意
5.1 HPV6、11、16、18、31、33、45、52及び58型以外のHPV感染に起因する子宮頸癌又はその前駆病変等の予防効果は確認されていない。
5.2 接種時に感染が成立しているHPVの排除及び既に生じているHPV関連の病変の進行予防効果は期待できない。
5.3 本剤の接種は定期的な子宮頸癌検診の代わりとなるものではない。本剤接種に加え、子宮頸癌検診の受診やHPVへの曝露、性感染症に対し注意することが重要である。

HPVワクチン(シルガード9)の取り扱い説明書

11. 副反応

次の副反応があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には適切な処置を行うこと。

11.1 重大な副反応

11.1.1 過敏症反応(アナフィラキシー(頻度不明[†])、気管支痙攣(頻度不明[†])、蕁麻疹(頻度不明[†])等)

自己免疫疾患

11.1.2 ギラン・バレー症候群(頻度不明[†])

四肢遠位から始まる弛緩性麻痺、腱反射の減弱ないし消失等の症状があらわれた場合には適切な処置を行うこと。

11.1.3 血小板減少性紫斑病(頻度不明[†])

紫斑、鼻出血、口腔粘膜出血等の異常が認められた場合には、血液検査等を実施し、適切な処置を行うこと。

11.1.4 急性散在性脳脊髄炎(ADEM)(頻度不明[†])

接種後数日から2週間程度で発熱、頭痛、痙攣、運動障害、意識障害等があらわれることがある。本症が疑われる場合には、MRI等で診断し、適切な処置を行うこと。

[†]本剤又はガーダシルの自発報告で認められた副反応

重篤な副反応が起きることがあることが明確に記載されている

厚生労働省

2025年1月の審議会で初めて報告された協力医療機関受診患者の一部のデータ

ブロック拠点病院を受診した患者44人のデータ

44人中37人が1ヶ月以内の発症 平均年齢 18.2歳（12－42歳）

接種回数

初回：21人、2回目：12人、3回目：10人

自覚症状

- ・ 疼痛及び感覚（光・音・におい）の障害 25人
- ・ 運動障害 17人
- ・ 自律神経障害 11人
- ・ 認知機能障害 1人

他覚所見ありまたは検査異常あり 17人

関節の可動制限、筋力低下、紅斑など

つけられた診断名

急性散在性脳脊髄炎もしくは多発性硬化症 1人
失神発作、起立性低血圧、不安神経症疑い
右肩甲下筋腱板炎、右小円筋腱板炎
ワクチン接種後肩関節障害 など

複合的な副反応被害と、確立しない治療法

◆ 副反応の**症状**は多様で、ひどい頭痛、全身の疼痛、脱力、不随意運動、歩行障害、睡眠障害、月経障害、記憶障害、学習障害など、**多様な症状**が一人の患者に**重層的**にあらわれるものです。この重篤な副反応の**治療法**は**確立していません**。

▶ 一人にいろいろな症状が重なって出ているよ

症状が複雑で理解されにくい

治療法がみつからない



◆ 国が全国に設けた協力医療機関には、「このワクチンに副反応なんてない」と、被害者を**詐病扱い**するような医師もあり、十分に**機能していません**。被害者を真摯に診てくれる数少ない病院を頼って**1000キロ以上**移動せざるを得ない被害者もたくさんいます。

▶ 「協力」医療機関でも治療してもらえない。だれを頼ればいいんだろう??

「因果関係が否定できない」として 健康被害救済されている件数

公費接種（医薬品副作用被害救済制度）

2011年7月以降

認定 409件
否認 186件

定期接種（予防接種健康被害救済制度）

2015年9月以降

認定 96件
否認 44件
保留 13件

505件

この中には原告も
多数含まれているのに
被告（製薬企業・国）は
117人の原告は
すべて“心因性”と主張

赤磐市の ホームページ

子宮頸がん予防ワクチンについて

定期接種について

子宮頸がん予防ワクチン（ヒトパピローマウイルス様粒子ワクチン）は、平成25年から小学校6年生～高校1年生の女子を対象に定期接種として位置づけられました。

その後、ワクチンと因果関係を否定できない持続的な疼痛がヒトパピローマウイルス様粒子ワクチン接種直後に見られたことから「同副反応の発生頻度がより明らかになり、国民に適切な情報提供ができるまでの間、積極的に定期接種を勧奨すべきでない」とされ、積極的な接種勧奨を控えてきました。

しかし、今般ヒトパピローマウイルス様粒子ワクチンの安全性について特段の懸念が認められないことに加え、接種による有効性が副反応のリスクを明らかに上回ると認められ、令和3年11月26日より、積極的勧奨が再開されています。

※対象者の方は、下記リーフレットをよく読み、**ワクチンの有効性と安全性を十分理解した上で受けるようにしてください。**

○令和8年度定期接種対象者

- ・平成22年4月2日～平成27年4月1日生まれの女子



[HPVワクチン接種の対象年齢の方及び保護者の方向けリーフレット（概要版）（PDFファイル：2.2MB）](#)



[HPVワクチン接種の対象年齢の方及び保護者の方向けリーフレット（詳細版）（PDFファイル：4.2MB）](#)

[厚生労働省ホームページ（HPVワクチン）](#)

この表現では、「**有効性があり安全である**」と**印象づいてしまう。**

また受けることが前提であるような表現。偏った内容。

代替案

有効か否か、安全か否かを検証し、接種をするかどうかを判断してください。

など

子宮頸がん検診

2026年1月

報 告

報 告

2023年〔総括1〕 子宮頸癌 治療患者進行期分布

婦人科腫瘍委員会報告

2023 年患者年報

婦人科腫瘍委員会の2023年患者年報（2023年1月1日～12月31日治療開始症例）の報告をいたします（488機関）。

従来から、患者年報のデータについては、本委員会で登録データを解析し、各登録機関への疑義照会を行ってまいりました。データのさらなる品質向上を目的として、2013年患者年報よりデータマネージメントのシステムを見直し、プログラム化した疑義照会を実施しております。

全患者（23,460人）のうち、
CIN3（前がん病変）：15,399人

+

早期がん（I期）：3,438人

||

18,837人（80.3%）

8割が早期発見できている

定期的に検診を行えば、さらに向上可能

※日本の子宮頸がん検診受診率：43.6% 2022年国民生活基礎調査（厚生労働省）

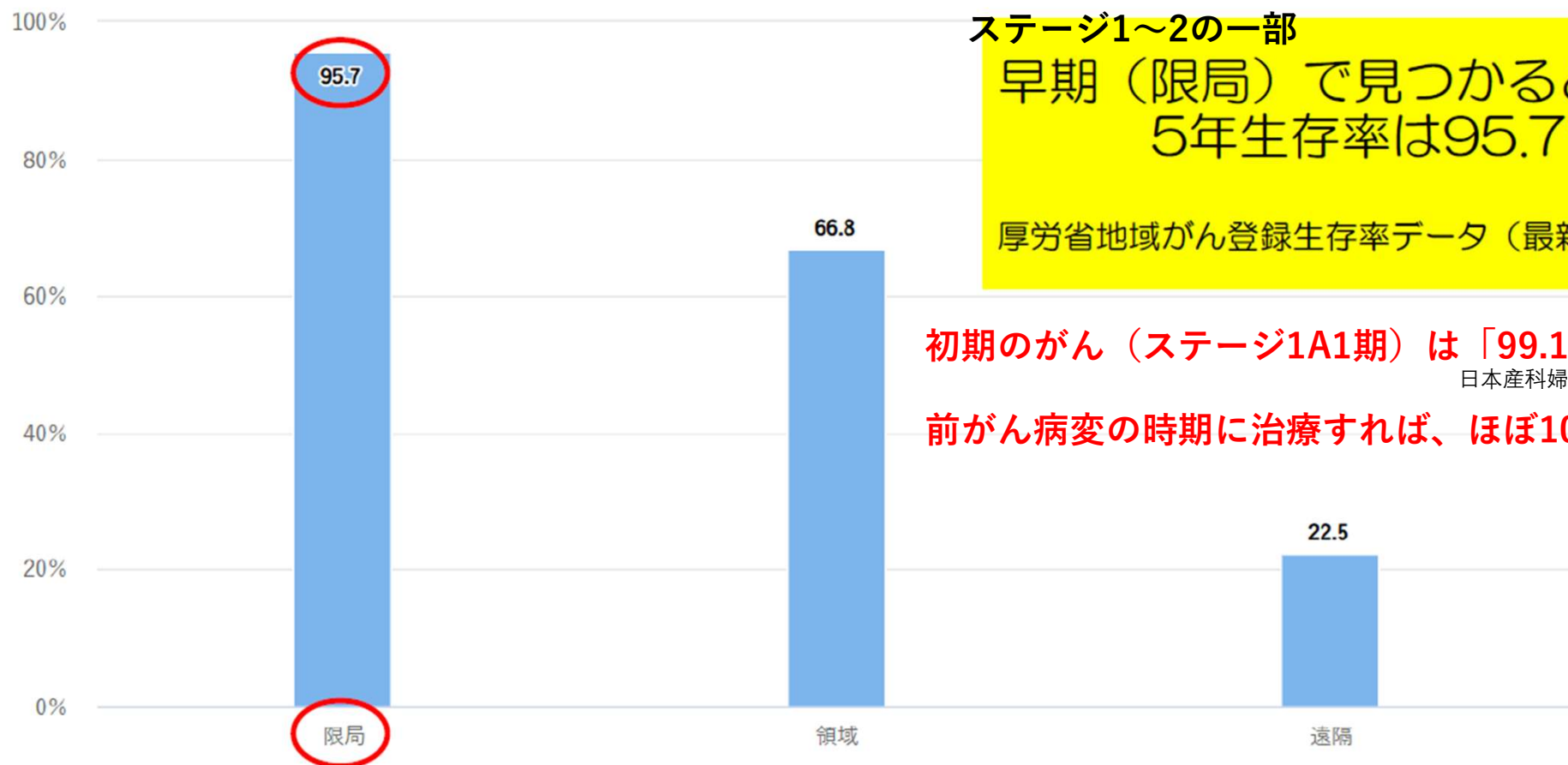
進行期	例数	がんになる前に見つけた！			
CIN3	15,399	15399人			
進行期	例数	%	細分類	例数	%
I期	3,438	42.6	IA1期	1,202	14.9
			IA2期	364	4.5
			IA期(亜分類不明)	14	0.2
			IB1期	512	6.4
			IB2期	832	10.3
			IB3期	421	5.2
			IB期(亜分類不明)	6	0.1
			I期(亜分類不明)	87	1.1
II期	1,297	16.1	IIA1期	220	2.7
			IIA2期	167	2.1
			IIA期(亜分類不明)	8	0.1
			IIB期	902	11.2
			II期(亜分類不明)	0	0.0
			III期	2,394	29.7
IV期	932	11.6	IIIB期	293	3.6
			IIIC1r期	1,005	12.5
			IIIC1p期	549	6.8
			IIIC2r期	398	4.9
			IIIC2p期	39	0.5
			IIIC期(亜分類不明)	13	0.2
			IIIC期(亜分類不明)	2	0.0
			IV/A期	262	3.3
合計	8,061		がんになって見つかった 8061人		

早期がん
（I期）で
見つけた！
3438人

子宮頸がん検診の効果

臨床進行度別 5年相対生存率 【子宮頸部 女性 年診断例】

※がんと診断された人が
5年後に生存している割合が、
がん以外の原因で死亡する確率を除いた場合に
どれくらいになるかを示す指標



④子宮頸がん予防の方法

子宮頸がん検診

厚労省も
製薬会社も

検診を推奨している

◆厚労省のリーフレット



① 今からできること

日本では、小学校6年～高校1年相当の女の子を対象に、子宮けいがんの原因となるHPVの感染を防ぐワクチンの接種を提供しています。HPVの感染を防ぐことで、将来の子宮けいがんを予防できると期待されています。カナダ、オーストラリアなどでは女の子の8割以上がワクチンを受けています。



② 20歳になったらできること

HPVワクチンを受けていても、子宮けいがん検診は必要です。定期的に検診を受けることが大切です。



HPVワクチンを受けていても、検診が必要なら、ワクチンはいらぬのでは？

◆HPVワクチン(シルガード9)の取り扱い説明書

2025年1月改訂(第2版)
2023年3月改訂(第1版、相対変更)

商品名 シルガード®9 水性懸濁筋注シリンジ

商品説明 子宮頸がん予防薬(注)に注する成分等にSILGARD®9 Aqueous Suspension for Intramuscular Injection Syringesより調剤すること

2. 接種不適当者(予防接種を受けることが適当でない者)
2.1 明らかに発熱を起している者
2.2 重篤なアレルギー反応を起していることが明らかな者
2.3 本剤の成分に対して過敏症を呈したことがあることが明らかな者
2.4 上記に類する者のほか、予防接種を行うことが不適当な状態にある者

3. 用法の概要及び組成・性状
3.1 製造の概要
本剤は、1,2 組の2種類のヒトパピローマウイルス(HPV)多量のヒト人乳芽ウイルス様粒子(VLP)を含む製剤である。各型のVLPは、SiloCytochromeの成分であるCANADISC-5(商標)に含有した人乳芽をコードするプラスミドを導入して遺伝子発現を誘発し、培養した人乳芽の抽出液より回収される。含有するVLPは、アルミニウム含有のアドユバント(アルミニウムヒドロキシド)とシリンジ内容物上に吸着させ、アルミニウムを

4. 効能又は効果
ヒトパピローマウイルス6、11、16、18、31、33、45、52及び58型の感染に起因する以下の疾患の予防
○子宮頸癌(扁平上皮癌及び腺癌)及びその前駆病変(子宮頸上皮内腫瘍(CIN)1、2及び3並びに上皮内腫瘍(癌前)1、2及び3)
○外陰上皮内腫瘍(VIN)1、2及び3並びに上皮内腫瘍(癌前)1、2及び3

5. 効能又は効果に関連する注意
5.1 HPV6、11、16、18、31、33、45、52及び58型以外のHPV感染に起因する子宮頸癌又はその前駆病変等の予防効果は確認されていない。
5.2 接種時に感染が成立しているHPVの排除及び既に生じているHPV感染の程度の影響は確認されていない。
5.3 本剤の接種は定期的な子宮頸癌検診の代わりとなるものではない。本剤接種に加え、子宮頸癌検診の受診やHPVへの曝露、性感染症に対し注意することが重要である。性感染症に対し注意することが重要である。

5. 効能又は効果に関連する注意

- 5.1 HPV6、11、16、18、31、33、45、52及び58型以外のHPV感染に起因する子宮頸癌又はその前駆病変等の予防効果は確認されていない。
- 5.2 接種時に感染が成立しているHPVの排除及び既に生じているHPV関連の病変の進行予防効果は期待できない。
- 5.3 本剤の接種は定期的な子宮頸癌検診の代わりとなるものではない。本剤接種に加え、子宮頸癌検診の受診やHPVへの曝露、性感染症に対し注意することが重要である。
- 5.4 本剤の予防効果の持続期間は確立していない。